

資料

城山

「豊後の国佐伯」の(三)

國木田独歩

秋の半は過ぎ、余は紅葉狩りせんとて城山の頂に登り、暮葉蕭々の翻屢々耳を澄まして既に行方を追ひ、吾知らず古跡一種の寂莫に融け行くを樂みたり。

三十年の昔は茲に封建の古城立ちぬ。城市の民は月と日を羅山の肩に迎へて、これを古城の背に送りぬ。

今且残す処に其の石垣の及、石垣の上、建物の有りし跡は今尚且平坦なり。雜草茂り、松生ひ立ち、渾水入り乱れ荒廢に任かせり。満山の樹木暗く繁りて、幽徑縱横、猿の如き少年も時に迷ふ事ありと聞きぬ。

余が初めて佐伯に入るや恍々此の山に心動き、余は佐伯を去るも眼底其の景象を拭ひ去る能はず、此の山なくば余には殆んど佐伯なきなり。

夏の初め雨晴れたる朝、蟬の鳴くを始めて此の山

に聞きて、ここに漸く日の光の夏らしきを覺えたることありき。一犬深夜に市街の一端に吠りれば、城山の山道直ちに忘へて之を他の一端に伝ふ。吾之れを今も暗き夜に聞き、古城の妖精夜醒めて、頭をもたげしに非ずやと語りしこともありたり。

一夜篠風起り、庭園の樹木さへ多少の害を被りし時、独り城山に登りて其背面のもの寂し気なる処に至れば、驚駭纏ひたる石垣の蔭に人の声きこゆ。近づけば三人の村女可憐の姿にて折れ枝を集め居るを見しより、古城の跡を履しき血の通ふが如きを感じたり。夕陽を其の一角に送り、老鷹の目からかなる声と其の幽谷に聞く時は、われを古の民の如くに感じぬ。

佐伯の春先、城山に來り、夏先、城山に來り、秋又早く城山に來り、冬はもう寒き風の音を先、城山の林に聞く也。

城山寂たる時、佐伯寂たり。城山鳴る時、佐伯鳴る。佐伯は城山の土のなれはなり。

城山は遠く佐伯を囲む諸山に比すれば、近く佐伯に臨む孤立の小なき山に過ぎず。而も此山ありて此の城市は生ひ立ちし也。

(一) 若き日の國木田独歩、野茂樹着より